

The Gray's Elegy Argument

に対する一つの解釈

西村 敦

哲学の議論においては、ときとしてあまりに説明が不十分なあまり、その説明の短さと対照的にそれを理解するために長い時間を費やさねばならないことがある。『表示について』におけるラッセルのフレーゲ批判として有名な the Gray's Elegy argument もその一例であろう。この部分的な議論に対して特に名前が付けられたというのは、それがただ研究者の注目を集めてきたということであるが、私の見るところでは、この部分はその理解に対する議論や過程自体の実り豊かさ、または新たな問題圏の設定といった積極的な意味が認められた上でその名が付けられたのでは全然ない。むしろこの部分は、ラッセルの議論の拙さ、フレーゲに対する理解のなさを揶揄する意味合いで名付けられたと言ったほうがよいであろう。

本稿ではこの the Gray's Elegy argument が主題的に扱われる。上に述べられたことが多少なりとも妥当であるならば、

果たしてこの部分を解釈することがどのような意味があるのかがまず問われねばならない。それは『表示について』という論文の全体の解釈と関係する。この論文は、分析哲学において最も重要な論文であると言われているにも拘らず、議論の内容自体はかなり粗雑な部分を含んでいる。その例として、上の the Gray's Elegy argument や、ラッセル本人も認める確定記述の第一出現と第二出現の曖昧さ、また、そもそも表示句を含んだ命題がこの論文で主張されている形に置き換えられるというのはどういうことを意味するのかについて説明が不十分であることが挙げられよう。つまり、この論文自体の完成度については、それを難じるに十分な要素があることは事実なのである。それにも拘らずこの論文が重要であるのは、確定記述の分析や、見知りの知識と記述の知識、また心の分析に関する示唆など、哲学的に興味深い議論が散見されているからである。この論文のタイトルは『表示について』であ

るにも拘らず、後世の哲学者は、そしてラッセル自身さえも、表示句について注目するのは確定記述のみであることからそれが窺えよう。

このように、『表示について』における不明瞭な部分、特にその最たるものと言える the Gray's Elegy argument は、この論文の哲学的成果をなす部分から切り離される傾向にある。そしてこのことが、全体の中でもその意味が明確で価値が高い部分だけに注目するという、研究者のこの論文に対する扱い方を規定していると言えるのだが、次に示すように、この部分に関する解釈を試みているものを含む、この論文の先行研究は、この見方をますます補強しているのである。

『表示について』を読んだことがあるものならわかるとおり、このラッセルの議論は、恐らく悪い意味ではあるが読者に強烈な印象を与える。しかし、この論文について扱っている研究の殆どは、それを無意味であるとして無視するか、難解であることを認めた上で、これについて論じることを行っている。それは別段責められるべきではなく、それだけこの議論が読者泣かせの不親切なものだということである。それでもこの議論を解釈しようとするならば、解釈者はこの難解さをどうにかして解きほぐさなければならないのだが、そのために今までとられた方法は大きく二つに分けられると考えられる。その一つは、現代の分析哲学、あるいは論理学を用いてこの部分を解釈することであり、もう一つは、この議論において明確化されていない前提、つまりラッセルの『数学の原理』からの命題観や、彼のフレーゲの理論に関する理解

を明らかにすることである。この議論について論じている先行研究においても、それが何らかの解決を与えようとするものであれば、その解釈は上の二つのいずれかあるいは両方をとっているものがほとんどである¹⁾。よって、この部分は研究者によつて次のいずれかの仕方であつてきたと言つてよい。すなわちそれは、その難解さ故に素通りされるか、あるいは同じくその難解さ故に『表示について』という論文に書かれていないことを補つてはじめて解釈可能なものとされてきたのである。それらの態度は、この論文を、哲学的に必要な論点をなすところと、不明瞭で難解な故に孤立させて考えなければならぬところとに分離されなければならないものとして捉えているという点では、同様であると考えられよう。

筆者は『表示について』に対する上のような扱いが必ずしも不当だとは考えない。事実、the Gray's Elegy argument における難解な論証を見ると、上のように考えるのがごく自然であるように思える。そして、『表示について』が分析哲学において重要な論文とされているのは、全体的な出来はともかくとして、重要な論点が散見されているが故であるということについても批判するつもりはない。しかし筆者は、この論文の価値がそれに尽きることには賛同しない。この論文が優れて分析哲学上の古典といわれる所以は他にもある、そう考えるのである。そしてこのことは、この論文全体を見渡すある地平が開かれたとき、その全体における the Gray's Elegy argument の役割とともに明らかになるといふことを以

下で示したい。そのためには、この論文において特に難解な部分であり、解釈者がほとんど常にその部分だけを抜き出して孤立的に捉えてきたこの議論を、その全体の流れの中で解釈する作業が必要なのである。さらに、この解釈の中で、『表示について』がラッセルの思想的脈絡の中でどう位置づけられるかについての一端も見えてくるであろう。

以上のことを論じるため、本稿は以下の順序で論が進められる。まず第一節でラッセルが『表示について』において前提としている「意味」と「表示対象」という概念について、それが論じられる文脈とともに簡単に説明する。次に第二節にて、the Gray's Elegy argument の解釈を行う。尚、フレーゲにおける Sinn と Bedeutung は通例それぞれ「意義」と「意味」と訳されているが、本稿においてそれらはラッセルにおける概念と同様、「意味」と「表示対象」と訳される。本来はフレーゲの Bedeutung の訳にラッセル哲学におけるテクニカルタームである「表示」という言葉が含まれていることは誤解の恐れがあるのだが、本稿ではフレーゲにおける Sinn と Bedeutung はそれほど詳細に論じられないこともあり、表記における簡略さを優先して、これらの概念の訳語はラッセルにおけるそれらの概念と同様の訳語をあてることにする。また、本稿では「意味」という語は、「表示対象」と対になるが概念とは別に、通常の使い方で用いられるので、混同を避けるため、「表示対象」と対になる「意味」という語については以後全て括弧を用いて表現することとする。これと合わせて「表示対象」も括弧を用いて表す。本稿においては意

味という同じ言葉が二つの使い方において多用されるので、筆者は曖昧さを避けることを優先したのだが、以後、特に第二節では表記が煩雑になることをご容赦願いたい。

一 「表示について」における「意味」と「表示対象」

以下では「意味」と「表示対象」という概念が『表示について』においてどのような脈絡において、いかなる内容をもって論じられているかが考察される。ラッセルは最終的には the Gray's Elegy argument においてこれらを否定するのだが、この論文において彼がその否定に紙幅を割いているということは、それが検討され、反論される価値があったことを彼が認めていたということである。それでは、どのような面で彼はこの概念の意義を認めていたのだろうか。

まずラッセルは『表示について』で、表示句を含む命題についての置き換えについて説明した後、マイノングとフレーゲの批判を行う。何故自説と対抗する思想家としてこの二人が選ばれたかということについて詳しく述べられていないのだが、その後の議論の展開を考えると、それは、何を命題の構成要素とするか、ということに関してこの二人がそれぞれ独自の思想を持ち、反論される価値があると彼が判断したからであろう。それでも、この二人でなければならぬ理由としては十分ではないが、ここではそのことについてはこれ以上検討しない。さて、このうち文の構成要素や句がそのまま命題の構成要素であるとするマイノングの立場、つまり「アポロン」、「現在のフランス国王」、「丸い四角」が文字通り存

在するとする立場は、「現在のフランス国王は存在し、かつ存在しない」、「丸い四角は丸く、かつ丸くない」という命題を導いてしまい矛盾率を犯してしまうとすることでごく手短な議論で退けられてしまう。マイノングの立場が実際にこのように単純に退けられるのか、あるいは、よく言われる「マイノングアン」という用語が野放図に存在者を認める立場をさす語として適切かどうかは疑問であるが、この点についてはここでは触れない。

ラッセルは以上のようにマイノングの立場を退けた後に、フレーゲについて論じている。彼は、フレーゲの立場は上のような形で矛盾律を犯すことがないという点でマイノングの立場より優れているとしているのだが、このことの詳細については『表示について』では論じられていない。よって以下で「意味」と「表示対象」についての説明とともにその議論を再構成しよう。

まず、フレーゲの「意味」と「表示対象」という区別は、指し当たっては、任意の有意義な語あるいは句を持つ、対象の与えられ方とその対象そのものという二側面であるというように理解しておこう⁽²⁾。例えば「プラトンの師匠」は、ソクラテスを表示するが、ソクラテスその人とは別に、その与えられ方も我々はこの句で理解しているといえる。さて、このように有意義な語あるいは句にこれら二側面を認めた場合、我々は「現在のフランス国王」という表示句について、その「意味」、すなわちその与えられ方はあるが、それが表示する対象は存在しないとすることができる。つまり、この

有意義な語結合を用いたからと言ってその存在について必ずしもコミットする必要はないのである。よって、「フランス国王は存在する」は偽と考えられ、先ほどのマイノングの場合のように、「フランス国王は存在し、かつ存在しない」という結論は導かれぬ。これはラッセルの議論の再構成であることは強調されねばならないが、ラッセルはフレーゲの立場を、このような単純な問題を解決できる程度には言語哲学的な工夫があるものとして注目に値すると考えていたと思つてよいだろう。

しかし、それでは「意味」と「表示対象」というのは何なのだろうか。先ほどの説明で不十分であるのは、「表示対象」というのは比較的意味が明瞭であるのに対し、「意味」に関しては、「対象の与えられ方」という機能を担うものとは何なのかについて何も触れられていないからである。この点については、ラッセルが用いた「意味」と、フレーゲのそれとが慎重に区別されねばならない。まずラッセルの理解について確認すると、このことについて彼は非常にはっきりと解答している。ラッセルは次のように述べる。

The center of mass of solar system is a point.

"The center of mass of solar system" is a denoting complex, not a point.⁽³⁾

そして、後者の引用符でくくったものを「表示的複合体(denoting complex)」と述べている。ラッセルにとっては、

れが「意味」なのである。この「表示的複合体」とはこれらの語が指す存在者が何らかの仕方で結合したものである。強いて記号で説明するならば「The center-of-mass-of-solar-system」(4)となる。[「表示対象」を与えるものは、やはりこの表示的複合体である。この理解が適切であるかどうかについては後ほど論じることとする。]

それに対して、フレーゲにおける「意味」と「表示対象」とは何なのだろうか。これを詳細に検討しようとするならば、『意義と意味』はもちろんのこと、『算術の基礎』『算術の基本法則』など、彼が論理学により数学を基礎付けるときにこの概念がどのような意図で導入されたかを論じなければならぬのだが、それは紙幅の許すところではない。ここではラッセルの理解に対し、単にフレーゲとの違いを際立たせるに留めよう。まず、フレーゲにとってはこの二側面は、常に記号あるいは記号結合に関して問われていることに注意しなければならない。彼によれば、「プラトンの師匠」という記号結合が、「意味」を示し「表示対象」を表示するのである。つまりこの三項関係がフレーゲにとってはこれらの概念の説明の上で本質的な役割を演じるのである(5)。一方、ラッセルにとって「意味」とは「表示的複合体」であった。そしてそれが「表示対象」を表示するのであるから、これは二項関係である。つまりラッセルは文字記号を扱っているという自覚が薄く、記号を介さないままに、議論が存在者の方に移ってしまったのである。

またフレーゲは確かに「意味」を「対象の与えられ方」と

しているが、数学的プラトニストであった彼は、彼の数理哲学上重要でもあるその概念が、各個人ごとに別々に与えられる主観的なものではなくそれらとは関係なしに客観的に存在するものと考えていた(6)。これで「意味」を説明するハードルはむしろ上がったしまうことになり、「客観的に存在するとされる対象の与えられ方とは何か」ということに彼は答えねばならなくなったのだが、これについて彼が自らの著作で明確に答えているとはいえない。ただ、彼はこの概念の他の思想家の理解に対しては書簡などで批判している。ラッセルもその理解を批判されたものの一人なのだが、フレーゲとの書簡において「意味」と「表示対象」についてのラッセルとの違いが際だっているのは、まさに上で述べられた「表示的複合体」についての見解である。フレーゲはこれを「意味」とは見なせないと考える一方、ラッセルは、有名な「白雪を戴いたモンブラン」に関する議論において、「表示的複合体」を「命題の「意味」とし、フレーゲの「意味」と「表示対象」に関する思想とは違った見解を示しているのである(7)。

このようにラッセルとフレーゲにおけるこれらの概念の理解には相当の隔たりがあるのは事実なので、この違いを指摘することでラッセルのフレーゲに対する無理解を示し、その上で the Gray's Elegy argument の有効性を批判することは、この議論に対する一つの可能な解釈である。しかし、フレーゲ自身、第4節(第4章)の文章の解釈においては、この「意味」というものが、何らかの理解の対象として与えられねばならないことを認めているのであるから(8)、それが何なの

かは説明されねばならないだろう。繰り返しになるが、このことについて、はっきりと一通りに理解できるような説明を彼が与えているとは言えない。それに対しラッセルは上で述べた見方をとるのだが、このように「意味」に積極的に対象を割り当てたことは、それがフレーゲの正しい理解とは言えないにしても、ラッセルにばかり責があるとは言えないであろう。よって以後では、ラッセルの理解が独自であることは認めながらも、その正当性も一部ではあるが認めた上で議論を進めることとする。

II the Gray's Elegy argument の解釈

以下で我々は the Gray's Elegy argument を検討する。前述のとおりこの議論は非常に読者に対して不親切のものである。我々はその都度ラッセルの言わんとしていることを、本質的な部分を逸してしまわない限りにおいて具体的に再構成する必要がある。その際、彼のとっている前提に賛同できるかできないかが、その根拠とともに論じられることになるだろう。尚、本来ならラッセルが実際に例として用いる英国の詩を用いるべきだが、わかりやすさを考え、以下の説明においては例として我々になじみの深いものを選んでいく。

II-1 the Gray's Elegy argument の前提 諸前提について

まずラッセルはこの議論において、フレーゲの理論に対する反論をなしている最初の部分で奇妙なことを断言する。「A

の「意味」というとき、Aにおいて問題になっているのは常に「表示対象」であるというのである。それは例えば、「平家物語の冒頭の第一節の「意味」というとき、これは「祇園精舎・の・鐘・の・声」、つまり、「平家物語の冒頭の第一節」の「表示対象」について、その複合体を問わねばならないということである。まずこれが、おそらくこの著作の読者が最初に理解に苦しみるところであろう。必ずしもそうでなくてはならない理由は一見するとなないように思えるからである。「Aの「意味」という言葉を用いる場合、我々は文脈に応じて、Aが複合表現のときでも、これ自体が問題になっているのか、これが表示するものが問題になっているのかを判断できるであろう。このように考えると、ラッセルの主張は必ずしも正しいとは言えないように思える。しかしそこに現れている複合体そのものが問題になっているときの「Aの「意味」における「意味」と、その「表示対象」が問題になっているときの「Aの「意味」における「意味」とは厳密に言うとは異なっているといえるだろう。「の」の「意味」というように、「意味」を対象を与える関数だと考えれば、前者はその入力された複合体そのものの「意味」を問題にするのに対して、後者の「意味」はその入力した「表示対象」に関してその「意味」を問題にする。つまり、前者の「意味」を用いると、「平家物語の冒頭の第一節の「意味」は「平家物語・の・冒頭・の・第一節」を返し、後者を用いると、それは「祇園精舎・の・鐘・の・声」という複合体を返す。以下の議論では、ラッセルの議論に沿って、後者の、つまり「表示対象」を問題にす

る「Aの「意味」」を用いる。何故前者の「意味」を無視してよいかは後に論じられる。

この「意味」の説明の次に、ラッセルは命題において複合表現は全てその「表示対象」が問題になるという前提を我々に押し付ける。例えば「スタゲイラ生まれの、アレクサンダー大王の家庭教師をしていた哲学者」は自動的に「アリストテレス」と同じでなければならないということである。これは一見正しいように思えるが、全ての場合についてそう主張すると、文脈に応じて実際に我々はこの二つを使い分けているという事実に反するから、「意味」についての上の議論と同様に、無条件に受け入れられるものではない。しかしラッセルはそれを前提に議論を進めているので、彼の方針に沿って議論を進めよう。何故そうしてよいのかは、前段落における「意味」の場合と同様に後ほど触れられる。

以上のことは「意味」というオペレーターと複合表現に関するラッセル的な前提である。これらのうち、いずれかを受け入れなければラッセルの議論は成り立たなくなるということをここで強調しておこう。

二. 二. C. とCの論理的関係について

これらのことを踏まえただけで、ラッセルの議論を私なりの実例を用いて再構成すると次のようになる。我々は、例えば「坊ちゃんの著者」吾輩は猫であるの著者」という同一性言明において、それが「坊ちゃんの著者」坊ちゃんの著者」とは同じ認識価値を持たないというのであれば、それが何故

であるか説明しなければならない。「意味」と「表示対象」という枠組みで説明するならば、「坊ちゃんの著者」と「吾輩は猫であるの著者」は「表示対象」は同じだが「意味」は異なる」という主張がそれに当たるだろう。そしてそれは再び命題であり、これは今度は「意味」という存在者にコミットしている。言い換えると、それは「坊ちゃんの著者」という複合体、つまり「意味」と、「吾輩は猫であるの著者」という複合体を存在者として認めた上で、これらに関する言明を行っている。つまり、何らかの複合表現が与えられたとき、その「意味」を対象化し、それについて語らなければならない場合があるとラッセルは主張するのである。

しかし、前の前提を受け入れるならば、これらは実は表現としては適切ではない。何故なら、複合表現は常に「表示対象」として現れるので、以上の表記だと「夏目漱石の「意味」」「夏目漱石の「意味」」と同じことを言っているからである。よって、「坊ちゃんの著者」の「意味」を語るために、「坊ちゃんの著者の「意味」」とは異なる、何らかの複合表現が必要である。ここで、上の「意味」の場合と同様、「」」に関して、その複合性そのものを問題にするものと、その「表示対象」を問題にするものというように二種類のものを考えればこの議論は解決されるてしまうだろうが、ここでは「」」に関して後者の一種類しかないものとして議論を進めよう。さて、以上のことは次のように一般化できる。すなわち、ある複合表現Cがあった場合、その「意味」を「表示対象」とする表現、C₁がなければならぬ。ラッセルがフレーゲの理論

に関して困難を見出すのは、この、 C と C との論理的関係についてである。その関係についてラッセルは次のように述べている。

そして C は、 C の「意味」のように、この複合体の構成要素とはならない（この複合体とは、 C のこと）。なぜなら、もしこの C がこの複合体に現れたら、そこで表れるのはその「意味」ではなく、「表示対象」であり、「表示対象」から「意味」へと逆戻りする道はないからである。何故なら、対象は無数の仕方で異なった表示句で表現されるからである（9）。

このことからラッセルは「 C と C の論理的関係が不明である」と主張する。しかし、読者からしてみれば、この主張自体の意味内容や、その妥当性、または上の言かららどのようにしてこのラッセルの主張が導かれるかの方が余程不明である。結論から言うと、どう好意的に解釈しても数々の解釈者を苦しめてきたこの部分を整合的にするのはほぼ無理であろう。しかし、以下で示したいのは、この部分のある好意的な解釈が、この部分を説明するのには役立たなくても、ラッセルの全体の主張のフォロワーには役に立つことである。まず、何故ラッセルがこのような議論をしているのかについて、私なりに少し補足しておきたい。 C が C を含む場合、 C が「表示対象」として現れるということは何を意味するのか。この場合、 C の「意味」は、 C を含む以上、 C とい

う複合体を含まなければならない。しかし、 C が「表示対象」を与えるとき、通常はその C の「表示対象」のみがその与える対象に関係し、 C という複合体は関係しないと考えられる。例えば、「 $1+2$ 」を考えよう。これの「表示対象」は「 $1+(1+1)$ 」としても「 $1+(3-1)$ 」としても変わらない。（ $1+1$ ）や（ $3-1$ ）という、2が「表示対象」である複合体そのものは、この全体を与える3という「表示対象」を与えるためになんら寄与するものではない。この、 C において C が「表示対象」として現れるとき、 C の複合的な構造は、 C の「表示対象」に対して何も貢献しないということが、ラッセルの言いたいことではなかったかと推測できる。もちろん、ラッセル自身あまりにも粗雑にこの議論を済ませてしまっているので、これは推測の域を出ない一つの好意的な解釈であるということを強調しておこう。

しかし、上の推測がもし正しいとしても、それが、 C が C を構成要素としてもたない、ということの根拠となるだろうか。上の主張をまとめると、 C は C の「意味」を「表示対象」としてもつ表現だが、これが C を含んだ場合、 C の部分は「表示対象」として現れ、 C の「意味」という複合体は問題とならない。そして、 C の「表示対象」は C という複合体とは関係なしに与えられるということになる。しかしこのことが、 C が C の「意味」を「表示対象」とする表現とならないということを保証するかどうかは、非常に疑わしい。このことは直観的に自明であるとはとても言えず、もしそのことを主張したいのならばさらに詳しい説明が必要と

なるであろう。そのためには、「意味」と「表示対象」がどのような性質を持ち、これが一般的にどんな関係にあるかについて詳しく論じられなければならない。しかし、ラッセルがこの議論でそれを行っているとさえ言えず、これは、この議論がそれ自体としてはフレーゲの議論の決定的な反論とならないということを示していると言えよう。

とにかく、私はこの前提は疑わしいと考える。しかし、そのことは実はラッセルの議論にそれほど影響しないのである。ラッセルの主張をもう一度確認すると、彼は件の「C」とCの関係が不明である、言い換えればCの「意味」を表示する「C」というものは一体何なのかを具体的に与えることができないとしているのであるが、それは以下のようにフォローすることができ。

ラッセルは「C」とCの関係が不明である」ということの根拠が、「C」はCを含むことができないということであるとしている。私は疑わしいとしたが、もしこのことが事実だとしたら、それは理解できることである。ラッセルは「C」がどのようなものをかを定める基準を求めていたのだが、「C」がCと関係を持つための唯一の手掛かりとなると思われる、Cという複合体は、「C」の中に含まれることができない。よって「C」とCは全く違う複合体であり、「C」が存在したとしても、Cとの関係は不明である。しかし、「C」がCを含むことがありうるとしても、「C」とCの関係が不明であることは変わらないのである。「C」はCを含むかもしれないし、含まないかもしれない。Cを含まない場合はもう考

えたので、含む場合に「C」がどのようなものとなるかの候補を挙げてみよう。まず、それはCそのものであることはできない。我々はラッセルの前提を受け入れているので、それは「表示対象」として現れてしまうからである。それでは「Cの「意味」というのはどうだろうか。これも、Cが「表示対象」として現れてしまっているので、一般に「C」ではありえない。「C」という、ラッセルが「意味」を語るために我々が通常用いているという表記はどうだろうか。これが不適切な理由は、この批判の最初のほうに述べられている。クオテーションマークがつくと、それは文字列として現れていると考えられるから、ある文字列が何らかの複合体を表示するとしても、それは「(言語)表現による関係」に過ぎず、それは論理的な関係ではないからである¹⁰。それは恣意的な約定であるから、他の文字列でも用をなすことができる。よってこれもラッセルが求める「C」ではない。

結局、「C」とCの論理的関係は不明である。確かに、このように候補となりそうなものを一つ一つ検討し、それらが全て「C」としては不適であることを示したところで、Cと論理的関係を有する「C」が存在しないということを意味しない。しかし、Cの「意味」を語るため「C」という表現を持ち出したとしても、現在のところその関係が不明な以上それは「C」という複合体（「意味」を「表示対象」とするもの）というアドホックな約定によってのみ、Cと関係を持つのである。もちろん、アドホックな約定を持ち出すことを厭わないのなら、「意味」と「表示対象」という概念を維持す

ることは可能であろう。

二・三 比較という観点からの解釈

ラッセルの議論を好意的に説明しなおすと、おおよそ上のようになる。では、このように考えることの意味は何なのだろうか。まず強調したいのは、上の「意味」と「表示対象」についての反論は決定的なものではないということである。「Aの「意味」の「意味」に関して、複合体を取り扱う「意味」を持ち出すことは可能である。ある複合体を含む命題が、常にその「表示対象」として現れるという前提も疑うことができる。また、「坊ちゃんの著者の「意味」と「吾輩は猫であるの著者の「意味」が違ふというために、「表示対象」ではなく複合体の同一性を判定する。」を新たに導入することもできる。上に述べられたように、アドホックな、C」という複合表現を持ち出すこともできないことではない。ラッセルの上の推論を無効なものとするには、以上のうちいずれかを認めればよいのである。

例えば、上の議論に対する反論を目的に「『』の「意味」に関して、上で挙げられたように、二つのオペレーターを認める」としよう。こうすると上の反論は成り立たず、フレーゲの理論は維持可能と考えられる。ここでさしあたって指摘したいのは、この理論においてはラッセルが認めない「意味」という存在者にコミットしているということと、「『』の「意味」というオペレーターが二つあるということである。さて、この理論のどこに問題があるだろうか。少なくとも the Gray

s Elegy argument の中での理論を反論することはもうできないであろう。

ここで、我々はフレーゲの理論それ自体ではなく、『表示について』におけるラッセルの記述の理論との比較において考察を進める必要が出てくる。フレーゲの理論と違い、ラッセルの理論では「意味」という存在者を認めないので、このようなオペレーターは必要ない。また、この理論では「意味」という存在者にもコミットしていない。よって、この点のみを見ると、それらの分だけ、つまり使われる道具がシンプルなことと、その理論における存在者が少ない分だけ、ラッセルの理論が優れているように見える。しかし、このこともラッセルの理論のフレーゲのそれに対する積極的な優位性ではないかもしれない。

そこで我々はこの論文全体に目を向けなければならない。ラッセルはフレーゲの理論が上述のような矛盾律を避けることができにくい綿密さを有することは認めているが、ラッセルの記述の理論でも同様に矛盾律を犯すことはない。つまり、この理論では、上で述べられた「現在のフランス国王」という句に対して、構文的に有意味であるとしながらそれに該当する存在者にはコミットしないことが可能である。しかも、この理論が有する利点はこれだけではない。これは他にも『表示について』において挙げられた様々なパズルを解くことができる上、「見知りの知識」と「記述の知識」の違いや心に関する分析手法といった、新たな哲学的な観点を与えることも示されている。つまり、ラッセルの理論には確

かな哲学的利点があるのである。フレーゲの理論と比べて、上述のことと並んでこのような強みがあるのであれば、これはラッセルの理論の優位性の決め手と思ってもよいのではないだろうか。

このように、the Gray's Elegy argument における前提を丁寧に確認し、かつ『表示について』全体の流れの中でこの議論を見たとき、我々はそれをフレーゲに対する決定的な反論というよりは、ラッセルの記述の理論のフレーゲの理論に対する優位を示しているものとして見る事ができるのである。我々は最初の前提として「」の「意味」に関して二つのオペレーターを与えることを考えたが、その他の前提をとつても、基本的には同様のこと、つまりシンプルさと哲学的帰結の豊富さとで記述の理論に軍配が上がるということが言えるのである。例えば、ラッセルの理論では複合表現は全て「表示対象」として現れるとしているが、これを否定した場合、どのような場合に複合体そのものがその命題の中で問題になり、どのような場合に「表示対象」が問題になるかが明確にされねばならない。このことに關する説明が不要な分だけ、ラッセルの理論の方がシンプルだろう。そして哲学的帰結に關しては上と同様である。

もちろん、このように解釈するとしたら、この議論はフレーゲに対してフェアではないことがわかる。この議論ではラッセルの理論の利点とフレーゲの欠点だけが述べられているからである。フレーゲの理論的強みが、上で挙げられたように矛盾律を避けることに尽きるということはあり得ないだろう。

そして、ラッセルの記述の理論は、果たして上で挙げられた哲学的成果を額面通り受け取ることができるかどうかとも問われねばならない。よって、もし我々が双方の哲学的思想に關して誠実であろうとするならば、この the Gray's Elegy argument は、フレーゲに対する決定的な反論を提供しているものとしてではなく、むしろそこから、上で述べられた論点を含む双方の理論の明確化、洗練化がなされねばならないものとして解釈すべきではないだろうか。そのように考えずに、この部分を全体から切り離し、フレーゲに対する決定的な反論と受け取ってしまうと、我々は解釈の泥沼に陥ってしまうであろう。

三 結び

以上の議論で、本稿の the Gray's Elegy argument の解釈が『表示について』全体とどう関係するかは、ある程度見えてきたはずである。この解釈によれば、この議論はラッセルがこの論文で論じている記述の理論の内実が補完されて始めて完成するものである。そして上ではその内実に関しては既に与えられたものとして前提したのだった。しかし、先に触れたように、我々はラッセルの記述の理論が本当に哲学的成果を享受するに値するかを疑うこともできるのである。もしラッセルの理論を肯定的に受け取ることを選ぶのであれば、その疑問を払拭すべく、我々は『表示について』における内容に踏み込んだ上で、その理論の妥当性を検討し、必要に応じてそれを改良しなければならない。そのためには、この論文にお

いてラッセルが論じている個々具体的なことが明らかされなければならぬのはもちろんだが、それ以上に根源的なこと、つまり、ラッセルがこの論文においてそれほど明示的ではない形で分析の際に道具としていた「論理学」とは何で、それは何から構成されているのか、そしてそれによる分析の対象となる「命題」とは何であり、その構造はどうなっているのか、そもそも前者によって後者を分析するとはどういうことなのか、そして、その分析が不十分であるとするならばどう改良されるべきかについての考察も併せて必要となるであろう。これらを検討するのは後の機会に譲ることにするが、もし上の解釈が妥当であるならば、この論文はラッセル哲学という枠を超え、分析哲学に従事するものに共通の問題圏を与えているものとして見ることができるのではないだろうか。

最後に、上の考察がラッセルの哲学に対する見方にもある一定の光を与えることを指摘したい。この解釈によって、我々は『表示について』における様々な概念、特に「論理学」や「命題」といった重要概念を明らかにすることではじめて、上の議論が一つの完成を見ることを確認した。しかし、これを明らかにすることについても、様々なアプローチがありうるだろう。一つには、ラッセルの基本的な路線は受け継ぎつつも、時代に制約された彼の荒削りな論理学ではなく、現代の論理学の助けを借りてこれらの概念について考察することが考えられる。また、ラッセルの思想的脈絡に即してこれらの概念を説明するのも一つのあり方であろう。もし後者を選ぶとしたら、我々はラッセルにおけるこれらの概念が時代と

ともに変遷していくことに注意せねばならない。ラッセルの論理学においては「命題関数」、「論理的固有名」、あるいは量化に対する独特の捉え方があるが、これらはラッセルの論理学の内に実には直接影響を与えているのである。そしてこれらの概念はラッセルの哲学、あるいは論理学の進展をまっけて始めて明確化されたものであり、当然『表示について』ではこれらの概念は、暗黙に使用されていたが明示化されてはいなかった。このように考えると、上に述べられた明確化の作業は、実は『表示について』だけにおさまる話ではなく、ラッセルにとって論理学とは、命題とは何だったのかを、その思想の進展を考慮に入れながら正しく評価した上で、始めて可能になるのではないだろうか。このことが上述の解釈と同様の構造を持つことを指摘し、本稿を終える。

【注】

- (1) 本稿は先行研究に対する批判検討は含まないので、先行研究については主なものを以下に挙げるに留める。A. J. Ayer, *Russell and Moore. The Analytical Heritage*, Cambridge, Harvard University Press, 1971, pp. 30-32; S. Blackburn & A. Code, "The power of Russell's criticism of Frege: 'On denoting,'" *Analysis*, 38 (1978), pp. 65-77; R. J. Butler, "The Scaffolding of Russell's Theory of Descriptions," *Philosophical Review*, 63 (1954), pp. 350-364; Alonzo Church, "Carnap's Introduction to Semantics," in *Philosophical Review*, 52 (1943), pp. 298-304; M. Dummett, *Frege: Philosophy of language*, London, Duckworth, 1973, pp.

- 266-268; P. T. Geach "Russell on Meaning and Denotation," *Analysis*, 19(1959), pp. 53-62. 松坂陽一著「フレーゲの Gedanke と ラッセルの Proposition - "On Denoting" の意義について」野本和幸編『分析哲学の誕生 フレーゲ・ラッセル』p. 257-276. またこの中で二頁前後の簡単な解説で終わらせて、一〇頁前後で比較的長く論じているものは、本稿で挙げられたものうちいずれかの手法で分析している。
- (2) Gottlob Frege, "Über Sinn und Bedeutung," in Ignacio Angelelli (ed.), *Kleine Schriften*, Hildesheim, Georg Olms Verlagsbuchhandlung, 1967, p. 144.
- (3) Bertrand Russell, "On denoting," in Alasdair Urquhart (ed.), *The Collected Papers of Bertrand Russell* 4, London, Routledge, 1994, p. 421.
- (4) この表記はもちろん筆者によるものではない。ラッセルがこのような表現を用いていることについては、例えば Bertrand Russell, "On Meaning and Denotation," in Alasdair Urquhart (ed.), *The Collected Papers of Bertrand Russell* 4, p. 316, で確認される。
- (5) Gottlob Frege, *Grundgesetze der Arithmetik*, Hildesheim, Georg Olms Verlagsbuchhandlung, 1962, pp. 50-51.
- (6) Frege, "Über Sinn und Bedeutung," p. 146.
- (7) Gottlob Frege, *Gottlob Frege Wissenschaftlicher Briefwechsel*, Gottfried Gabriel, Hans Hermes, Friedrich Kambartel, Christian Thiel, Albert Verant (ed.), Felix Meiner, Hamburg, 1976, p. 251. この議論では「モンブラン」は 4000 メートル以上の高さがある」という命題において「モンブラン」はこの命題の思想（意味）の構成要素であるか否かに関するものである。
- ちなみにフレーゲ含まれないとし、ラッセルは含まれるとしよう。
- (8) Frege, "Über Sinn und Bedeutung," pp. 151-152.
- (9) Russell, "On denoting," in Alasdair Urquhart (ed.), *The Collected Papers of Bertrand Russell* 4, p. 422.
- (10) Ibid., p. 421.

One Interpretation of The Gray's Elegy Argument

Atsushi Nishimura

In "*On Denoting*" Russell criticizes Frege's meaning (Sinn) and denotation (Bedeutung). His point is that if we accept these concepts in expressions such as definite descriptions we cannot find a logical relationship between them. But this argument, known as The Gray's Elegy Argument, is so awkward that it is difficult to fully grasp what Russell's meaning.

This essay is an attempt to interpret this argument. Many viewpoints can be used to interpret it. One way is to judge whether this argument is correct as a criticism of Frege's meaning and denotation; another is to give a valid interpretation with the help of contemporary logic. But in this essay, attention is paid to how this argument functions as a component of "*On denoting*". We can find in his paper that Russell's theory about denoting phrases is justified in terms of its usefulness: it provides us with a way to solve an ontological problem, an interesting difference between knowledge through acquaintance and knowledge through description and a method to analyze the mind. We can apply this characteristic in "*On denoting*" to the interpretation of The Gray's Elegy Argument. Namely, we can see this argument as an attempt to show how complicated and pointless Frege's meaning and denotation are in comparison with Russell's theory, rather than to give a decisive argument against Frege.

This interpretation has a particular strength. We are aware that Russell's philosophy often changes as he detects fault in previous thought or finds a sound theory that solves a problem and provides a sufficient basis for constructing a worldview. As such, one of the important point when reading Russell is that, acknowledging that Russell's philosophy is on the process of development, we note the reason for his having the theory or thought instead of ascertaining whether or not they are right in themselves. The Above interpretation matches this feature of Russell's philosophy.

(Doctoral Student of Kyoto University)